原点は今も変わらない。地域の農風景を守りたい。

特集 梨

林新吾・林誠吾
文：梶原圭三
写真：カワカミカズヨシ

「ひたすら石を拾っていた記憶しかないんです。大人の顔くらいある大きな石から、手掴みできる小さな石まで、ゴロゴロ出てきましたねー」。林誠吾さん（40 歳）は優しい笑顔で話し始めた。今から 34 年前、誠吾さんが小学校 1 年生だった昭和 58 年、林農園は浮羽町（現うきは市）の土地の開墾に着手した。その広さ約 120 アール。本格的に梨の栽培に軸足を切る大きな意思決定であった。

この物語は、林農園の現園主、林誠吾さん（40 歳）とその父親、新吾さん（67 歳）親子の長年に渡る変革の物語である。

黎明期

福岡県朝倉市杷木林田（はきはやしだ）地区。赤谷川流域に広がるこの集落は、古くからコメ、果樹の栽培が盛んであった。「杷木町史」によると、梨は明治の終わり頃から大正にかけて 6 軒ほどの農家が栽培を開始した。（余談ではあるが、筆者の祖父の実兄もこの梨農家の一つであった）。その後、昭和にかけ徐々に拡大し、昭和 35 年には、この地区に共同選果場が設立され共同出荷が始まった。当時は梨農家だけで 40～50 軒ほどもあり、この地区は梨の一大産地であった。林農園の歴史も古い。曽祖父の大助さんが、コメや葉タバコの副生産物として梨の栽培を始めたのが今から約 80 年前の事である。それを祖父の俊男さんが継いだ。林家に婿養子として入った俊男さんは、元々大工であったものの、人に使われる事を好まず、自ら農業に取り組んだ。昭和30年頃の事であった。

転機

その後大きな転機となったのが昭和 58 年。

当時、林農園の畑の半分ほどが高速道路の建設用地にかかってしまい、手放さざるを得ない状況になってしまった。多くの農家が栽培規模を縮小する中、当時 33 歳だった新吾さん（誠吾さんの父、現在 67 歳）は、栽培規模拡大を志し、新たな土地を購入すべく奔走していた。新たな土地といってもそう簡単に見つかるものではない。しかも農地として適した土地となれば尚更である。条件の良い土地を手放す農家などほとんどいない。自宅を引っ越すことも視野に入れ、候補地を自宅のある杷木町内（現朝倉市杷木）から、近隣の市町村まで広げ、新吾さんは探し続けた。そして、ようやく隣町の浮羽町（現うきは市）に土地を見つけた。しかしながら、お世辞にも良い土地とは言えない状態であった。そこは、うきは市の山中でやや小高い所ではあるものの鬱蒼とした杉林の先にある耕作放棄地だった。ただ、その土地は、隣町とはいえ自宅から車でおよそ 20 分という近さに加え、120 アールとまとまった広さがあった。その点でそこを手に入れ開墾する事を決めた。当時の事を、新吾さんはこう振り返った。「当時は若かったし、世の中の流れも、果樹の大規模栽培に向かっていたからやる気満々でしたね」。一気に倍の面積を栽培する事になるチャレンジに新吾さんは高揚していた。

父、新吾さんの変革

昭和 43 年、地元の農業高校を卒業した新吾さんは就農した。就農から数年後、結婚を機に「現代農業」を隅から隅まで読み込む、好奇心旺盛な新吾さんの姿があった。新吾さんが興味を示したのが有機農法であった。当時はレイチェル・カーソンの「沈黙の春」や有吉佐和子の「複合汚染」など環境問題を取り扱った書籍が世の中に問題提起をしており、新吾さんも大量の農薬や化学肥料を使用する従来の農業に疑問を持っていた。とは言え、農業高校で学んだ農法は一般的な慣行栽培。実家の農法も慣行栽培。しかし、新吾さんはその想いを父親の俊男さんに相談した。俊男さんは「好きにしたらいい」と背中を押してくれた。新吾さんの有機農法へのチャレンジがスタートした。好奇心旺盛な新吾さんは様々な勉強会に参加した。そのために日本中を旅した事もあった。そうしてたどり着いた新吾さんの農法の基本は「地力：ちりょく」を高める事。その土地が持っている本来の力「地力」を最大限高める事によって作物を育てる事を柱とした。その為に重視したのが土作りである。土には有機質肥料や堆肥、緑肥を使い、微生物の働きを最大限に利用し除草剤も一切使用しない。そうする事で果樹本来の力を引き出し、食味と甘味を高めている。「堆肥には、杉の皮とおからを利用しました。杉の皮もおからも捨てられていたものでしたから、それを再利用した訳です。堆肥舎を作り、多い時には 2 トントラック 30 台分程の堆肥を作っていました」。と、新吾さんは当時を振り返る。この考えは、今でも息子の誠吾さんにも受け継がれており、林農園で栽培されている梨、柿などの果樹は全て減農薬、無化学肥料栽培であるし、コメに至っては無農薬、無肥料の自然栽培を実現している。土にそれだけで済む地力があるという事なのだろう。

日迎梨（ひむかえなし）誕生

今から 35 年ほど前、新吾さんが 30 代前半だった頃、梨の研究の為に各地を訪ね歩いていた際、栃木県黒磯市（現那須塩原市）のある農家から一本の枝をもらった。それは「長十郎」という品種から突然変異した品種「日の出」の枝であった。その枝を地元に持ち帰った新吾さんは、接ぎ木し、実った梨から種を採取、苗を作っては育てる試行錯誤を繰り返した。晩生で大玉、病気に強い個体を選抜していった。年を経るごとに、10 本あった苗木は 8 本が駄目になり 2 本が残った。その 2 本を慎重に丁寧に育てるも 6 年目には、ついに最後の 1 本となってしまった。その残った 1 本が幸いにも順調に育ってくれた。できた実は香りも良く、晩生で大玉、果肉も緻密で、病気に強く、長期保存に適している事がわかった。収穫後マイナス 1 度の貯蔵庫で保存する事で香りが立ち、味に深みが出る事もわかった。真冬でも食べられる、林農園のオリジナル品種、日迎（ひむかえ）誕生の瞬間だった。一般的に新しい品種の改良は農業試験場や大学などの専門機関にて行われる。それを一農家がやり遂げてしまったのである。新吾さんの旺盛な好奇心と探究心、そして忍耐力の賜物である。新吾さんは当時を振り返って「たまたまですよ。偶然です。運が良かっただけです」と苦労を言葉にしない。確かに、品種改良の成功事例の確率など、天文学的数字になるのだろう。しかし筆者が想像するに、新吾さんが「地力」を大事にしていたからこそ、その偶然を呼び込んだのかもしれない。林農園の畑だからこそ、日迎（ひむかえ）が誕生した。そう言っても過言では無いように思えた。ちなみに、日迎（ひむかえ）の名前の由来は、筑紫平野の東端に位置する朝倉市杷木が以前から「日迎の里」と称されている事にちなんで名付けられたものだ。

画像提供：皿の上の九州実行委員会

farmer's inside storys and delicious foods world.